

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520590

研究課題名(和文) 語彙的説明と構文的説明の接点を求めて

研究課題名(英文) In Search of the Point of Contact between Lexical and Constructional Accounts

研究代表者

高見 健一 (Takami, Ken-ichi)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70154903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語の二重目的語構文と与格構文(そしてそれが示す「所有」の意味)、Cause/Let 使役文とその受身文、日英語の自動詞と他動詞の交替、日英語の場所格交替、日英語の数量詞遊離などの諸現象がどのような条件のもとで適格となるかを明らかにした。そして、従来の語彙的説明と構文的説明の不備を指摘し、機能的構文論の立場から包括的な説明を提示した。本研究の成果として、著書を6冊、論文を15編、執筆することができた。

研究成果の概要(英文)： This research has made clear under what conditions English double object and dative constructions (and their possessive meaning), Cause/Let causative sentences and their passive ones, alternation between intransitive and transitive verbs in English and Japanese, Locative Alternation in English and Japanese, quantifier float sentences in English and Japanese, and so on become acceptable. I have pointed out some serious problems with lexical and constructional approaches proposed so far for these phenomena, and offered comprehensive analyses from the viewpoint of Functional Syntax. I have written six books and fifteen papers as a result of this research.

研究分野：英語学

キーワード：統語論 機能的構文論 構文交替 形式と意味 二重目的語 使役文 場所格交替 数量詞

1. 研究開始当初の背景

英語の様々な構文の分析やその適格性の説明には、これまで動詞の意味に重点を置く語彙意味論研究と、構文自体が持つ意味や機能に重点を置く構文文法研究があった。しかし、多くの構文を詳細に検討すると、どちらの立場も一定の限られた例は説明できるものの、それぞれの構文の包括的な説明には至っていないことが明らかとなってきた。このような状況のもと、英語の諸構文の適格性条件をより包括的に捉えられる分析が望まれていた。

特に、本研究で対象とする英語の二重目的語構文 / 与格構文と「所有」の意味、使役文とその受身文、自動詞と他動詞の交替、場所格交替構文、数量詞遊離構文などに関しては、構文文法や語彙意味論、さらに生成文法、認知文法で多くの研究がなされてきたが、それぞれの立場からなされた分析、説明は、ある一定の例を説明できるものの、異なる立場から検証を行なうと、どうしてもまだ説明できない例や、予測とは異なる適格性の例が存在することが分かってきた。そのような状況の中、より多くの例を適切に説明できる分析が望まれていた。

2. 研究の目的

(1) 二重目的語構文は、間接目的語の指示物が直接目的語の指示物を「所有」という構文の意味があるのに対し、与格構文はそのような意味がないと言われてきたが、多くの反例があるため、どのような要因により「所有」の意味が生じたり生じなかったりするのかわかりやすくする。また、二重目的語構文をとる動詞によっても、「所有」の意味が生じるかどうかに関して違いがあることが分かってきたので、二重目的語動詞をその意味に基づいて下位区分する。

(2) Cause や let は受身文にならないと言われてきたが、適格な受身文も多くあるため、両者の適格性条件を明らかにする。また、cause 使役文、let 使役文の特徴は、make 使役文や get 使役文と比べて、これまで分析が少なく、不明な部分が多かったため、それらを明らかにして、後者の使役文とどのような点で異なり、どのような状況で用いられるのかわかりやすくする。そして、このような迂言的使役文が、他動詞を用いた語彙的使役文とどのような意味的違いを持っているのかわかりやすくする。

(3) 自動詞と他動詞の交替が可能な場合と不可能な場合の違いを明らかにする。英語では、例えば break, stop, burn, tear のような「能格動詞」は、自動詞としても他動詞としても用いられるが、play, hit, destroy のような動詞は、他動詞としてしか用いられない。一方、日本語では、「燃える-燃やす、壊れる-壊す」のような語彙的形態の違いで自動詞と他動

詞が表され、他動詞がない場合には、使役形でその意味が表されたりする。このような自他交替の動詞のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

(4) 場所格交替構文に用いられる動詞はどのようなものか、この構文の適格性条件は何かを明らかにする。そして、場所を目的語にとる場合と、移動物を目的語にとる場合の構文でどのような意味の違いが生じるのかわかりやすくする。この現象は英語だけでなく、日本語にも「部屋を花で飾る / 部屋に花を飾る」などに見られるように存在し、両者で意味の違いがあるため、日英語でその共通点と相違点を明らかにする。

(5) 数量詞遊離構文に関して、これまで統語論的分析がなされてきたが、この現象は、文の情報構造や話し手と聞き手の共有知識、文脈などに依存する現象だと推測されるので、より明示的で説得的な分析を提出する。また、生成文法の立場からこの現象に対して多くの分析が提出されてきたが、そのような分析の理論的、経験的問題を明示的に示すことを目的とする。

3. 研究の方法

「研究の目的」欄に記した諸現象に関して、これまでの語彙的説明と構文的説明の問題点がすでに明らかになっており、またそれらの主張に対する反例もすでに収集していたので、これらを出発点として、Karen Courtenay 氏や Nan Decker 氏 (ともに言語学 Ph.D.) 等の母語話者の協力をあおいで、様々な例文の適格性を調査した。さらにインターネット等を通して、実際に用いられている例文を多く集め、従来の分析に対する反例や、考察を深める上で示唆的な例を収集した。合わせて、研究対象の諸現象に関して、これまで提出されてきた統語的、意味的、語用論的分析を入念に整理し、その妥当性を検証した。そして、ハーバード大学名誉教授の久野暁氏との協議を重ね、研究対象の様々な構文の適格性を決定づけている要因を探り、そのような要因が判明した後、仮説を立て、その仮説でさらに多くの例文が例外なく説明づけられるかを検証して、その仮説の妥当性を確かなものとし、論文を執筆した。

4. 研究成果

(1) 二重目的語 / 与格構文と「所有」の意味は、それぞれの構文が持つ構文の意味に加え、主語指示物と間接目的語指示物が同じ場所、お互い手の届く範囲にいるか、離れているか、あるいは両者が別の場所にいるか、さらにそれぞれの動詞が表す語彙的意味の3つの要因に基づいて決まることが明らかになった。そして同時に、二重目的語構文や与格構文が独自に持つ意味のみに基づく分析や、動詞の意味のみに基づく分析が不十分で

あることも明らかとなった。

(2) Cause 使役受身文は、法律文書や科学的文書など、堅い格式的な表現で用いられ、被使役主が顔と個性を持った人間ではなく、「何が何によって引き起こされたか」という、論理的、非感情的で(機械的で)、間接的な原因結果を述べる際に用いられることが明らかになった。したがって、これまで cause 使役文は受身文にならないと言われてきたが、それは間違いであることが明らかとなった。

(3) Let 使役受身文は、be let のあとの動詞句が、その意味上の主語の習性・特性や、自動的に生じる、なるがままの普通の動作・状態を表しており、主語が放任・放置されることで、そのような修正や動作・状態が起こる場合に適格となることが分かった。したがって、これまで let 使役文は受身文にならないと言われてきたが、それは間違いであることが明らかとなった。

(4) 場所格交替における場所目的語構文は、当該の行為の結果、その場所の色や形状(形や状態)が大きく変化する場合に適格となることを明らかにした。したがって、移動物が目的語になる場合と場所が目的語になる場合では、両者が変形等によって派生するのではなく、意味が異なることから、両者はそれぞれ独立して基底生成されることが明らかとなった。

(5) 数量詞とそれが修飾する名詞句(その名詞句が左方移動を受けた場合には、その痕跡)との間には、その数量詞より新しい情報(より焦点性が高い情報)を表す要素が介入することができないことが分かった。そして、数量詞遊離現象を統語的に説明しようとする従来の分析には、極めて多くの経験的問題や重要な理論的問題があることを示し、この現象は意味的、機能的に説明されるべきものであることが分かった。

上記のような形で、それぞれの現象に対して適格性条件を提案し、さらに当初予定していた現象だけでなく、Make 使役文、場所句倒置文、絶対時制と相対時制、動詞句省略、日本語の「～である」構文なども考察し、機能的構文論に基づいて研究対象を広げることができた。そして、これらの現象に関しても著書や論文としてまとめることができた。

例えば、「～である」構文に関しては、伝統的な日本語文法研究で、ある動作が終わったあとに生じる結果が現在において残っていることを表す表現であると主張され、最近の生成文法や語彙意味論研究では、状態変化か位置変化を伴う動詞のみ用いられると主張されてきた。しかし、本研究では、「叩く、握る、打つ、撃つ、弾く、褒める、読む、見

る、話す、予約する」など、これらの動詞が表す動作のあとに結果が残らず、また状態変化や位置変化を伴わない動詞でも、この構文に用いられることを明らかにした。そして、この構文は、動詞が表す意図的行為が、過去において誰かによって何らかの目的でなされたことが話し手に明らかで、その行為に起因する状態が発話時において話し手にとって有意義であることを主張する表現であることを示した。

このように、本研究で様々な構文研究を行なう過程で、従来提示されてきた分析の問題点を指摘し、より多くの例を説明できる包括的分析を提示できたことは、大きな意義があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

Takami, Ken-ichi & Susumu Kuno (to appear) "Functional Syntax," Masayoshi, Shibatani, Shigeru Miyagawa & Hisashi Noda (eds.) *Syntax (Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series)* Mouton de Gruyter (査読有) 2017 発行予定。

Takami, Ken-ichi (to appear) "Quantifier Float in Japanese and English," Taro Kageyama & Prashant Pardeshi (eds.) *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series)* Mouton de Gruyter (査読有) 2017 発行予定。

高見健一 (2016) 「Ago と Before」多良静也(編)『英語と教育』第5号、1-17. 高知英語学英語教育研究会。(査読有)

高見健一 (2015) 「Time-away 構文の適格性条件」青木博史・秋元実治・前田満(編)『日英語の文法化と構文化』41-73. ひつじ書房(査読有)

高見健一 (2015) 「There 構文と場所句倒置構文」大庭幸男教授退職記念論文集刊行会(編)『言葉のしんそう(深層・真相)』27-38. 英宝社(査読有)

高見健一 (2015) 「二重目的語 / 与格構文と『所有』の意味」江頭浩樹他(編)『より良き代案を絶えず求めて』413-422. 開拓社(査読有)

高見健一 (2015) 「定冠詞と不定冠詞」『英語教育』64.7, 14-15. 大修館書店(査読有)

高見健一 (2013) 「統語論 機能的構文論」三原健一・高見健一(編)『日英対照 英語学の基礎』90-116. くろしお出版(査読有)

高見健一 (2013) 「Cause 使役文とその受身文」池内正幸・郷路拓也(編)『生成言語研究の現在』199-220. ひつじ書房(査読有)

高見健一 (2013) 「英語の進行形と日本語の『～ている』表現の違いをどう説明するか」『英語教育』62.10, 32-34. 大修館書店(査

読有)

Ken-ichi Takami (2012) "Remarks on Locative Inversion in English," Iku-Hwan Lee et al. (eds.) *Issues in English Linguistics*, 97-118. Hankookmunhwasa, Korea. (査読有)

高見健一(2012)「科学文法と学習英文法」大津由起雄(編)『学習英文法を見直したい』194-205. 研究社(査読有)

高見健一(2012)「使役構文をめぐって」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座2 構文と意味』69-87. ひつじ書房(査読有)

高見健一(2011)「場所格交替構文- 場所 が 物 に変わるとき」松原史典(編)『英語と教育』第2号、1-28. 高知英語学英語教育研究会。(査読有)

高見健一(2011)「機能的構文論」『日本語学』臨時増刊号。特集 言語研究の新たな展開。68-75. 明治書院(査読有)

〔学会発表〕(計10件)

高見健一「Nobody can see themselves directly, can they?-付加疑問文はどうなる?」「Land the plane と make the plane land はどこが違うか?-語彙的使役と迂言的使役の意味の違い」「Narrowly と Nearly-肯定か否定か」高知英語学英語教育研究会。2015.1.24. 高知大学。

高見健一「日本語の数量詞遊離再考-韻律的、統語的要因か、意味的、機能的要因か?」待兼山ことばの会。2013.12.20. 大阪大学。

高見健一「日英語の意味的・機能的な構文分析」東京言語研究所 2013 年度理論言語学講座。2013.5.16-7.25. (11 回)東京言語研究所。

高見健一「英語の場所句倒置構文と There 構文」東京言語研究所 2013 年度春期講座。2013.4.20. 東京言語研究所。

高見健一「A(n) や the はどんなとき付けるの?」大妻女子大学比較文化学部特別講演。2012.11.27.大妻女子大学多摩校舎。

高見健一「『バスが止まっている』は The bus is stopping か?」「A(n) があるかないかで大違い?」高知県立西高等学校英語科(3年生・2年生)招待講義。2012.11.6. 高知県立西高等学校

高見健一「英語の場所句倒置構文と There 構文」日本英文学会九州支部第 65 回大会、特別講演。2012.10.28. 九州産業大学。

Ken-ichi Takami "Remarks on Locative Inversion in English," The First World Congress of Scholars of English Linguistics(招待講演)2012.6.29. Hanyang University, Seoul, Korea.

高見健一「Cause 使役文とその受身文」津田塾大学言語文化研究所 英語の共時的及び通時的研究の会 発足 25 周年記念大会招待講演。2011.8.28. 津田塾大学。

高見健一「機能的構文論-省略現象を中心に」東京言語研究所 2011 年度春期特別講座。

2011.4.17. 東京言語研究所。

〔図書〕(計6件)

久野暉・高見健一(2015)『謎解きの英文法-副詞と数量詞-』くろしお出版。261 頁。

久野暉・高見健一(2014)『謎解きの英文法-使役-』くろしお出版。207 頁。

高見健一・久野暉(2014)『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版。272 頁。

久野暉・高見健一(2013)『謎解きの英文法-時の表現-』くろしお出版。199 頁。

久野暉・高見健一(2013)『謎解きの英文法-省略と倒置-』くろしお出版。259 頁。

高見健一(2011)『受身と使役』開拓社。219 頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

高見 健一 (TAKAMI, Ken-ichi)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号: 70154903